

今から12年前のお話。当時、私は49歳。アナタは何歳でした？

1999年はNPO法人 釜ヶ崎支援機構が誕生した年でした

あれから12年、釜ヶ崎が変わったことは、さて、なんででしょうか？

前号の夜間学校ニュースは、1992年、今から19年前のことを紹介しました。

それを見た人の曰く「この暴動って、90年のことやないか、92年というのは、記憶にないな。暴動っていう程のものではなかったかと違うか」

ウウ、まさに「人間五十年 下天の内を比べれば、夢まぼろしの如くなり。」わずか20年程前の出来事が、夢幻の如く不確かになっていく。

私もにわかには不安になり、家にあるゴミの山を探って見たところ、確かに90年の暴動関連は沢山出てきましたが、なぜか92年の新聞記事は、出てきませんでした。では、手身近の資料では92年暴動は証明できないのかと思いきや、「センターだより・縮刷版(101号 ↓200号)」に、左に紹介してある漫画がありました。それで、ホッと一息、私だけの幻ではなかった、と。新聞記事探しのお陰(?)で、別のものが出てきました。92年から7年後、今から12年前、99年10月10日付の読売新聞です。私が49歳の時のこととなります。短いで、全文紹介します。

### 釜ヶ崎支援機構NPOと府認証

野宿者の支援を目的に6月に設立された市民団体「釜ヶ崎支援機構」(西成区、本田哲郎理事長)が、府からNPO(非営利組織)の認証を先月29日に受け、9日までに法人登記も完了した。

法人格が確立したことで、大阪市が緊急地域雇用特別

## 加加(19) あはら替



▲上の漫画は、「センターだより」連載の「カマヤン」。ただし、今から19年前の1992年10月15日に発行された号に掲載されていたものです。

交付金を利用して拡大する野宿労働者向け特別就労事業（道路清掃など）の委託を11月から受ける見込み。市はあいりん地区以外の作業も加え、一日に出す仕事を現在より百五人増やして百五十人規模にする。

支援機構は、緊急宿泊用テントの運営や利用者名簿の入力、高齢者の生活・福祉相談、新規事業の企画などを手伝うボランティアを募集。寄付も募っている。問い合わせは事務局長の松繁逸夫さん（06・6000・0000）へ。

私（松繁）は、その後、55歳で「定年退職」していますから、事務局長であったのは5年ちよつとという短い期間であったことになりました。

で、ここからは、誠に申し訳ないのですが、古い新聞記事に触発された、やや早すぎる思い出話にお付き合い下さい。

まず、記事の中の電話番号ですが、自宅の電話番号になっています。そう、釜ヶ崎支援機構には、まだ事務所がなかった。行政は、「受託能力のあるところに委託するのだから、事務所設置、事務体制の整備は、当然自前で準備すること。委託費の前払いもないから、日々払う賃金も、一定期間分は自前で用意すること」と・・・。

銀行は、NPO法人には貸せない、という。結局、キリスト教

信者さんの寄付一千万円で資金確保。簡宿経営者に無理を言って仮の事務所を確保。当初、事務員はボランティア2名と私の三人。雇入通知書など出す余力もないし、出しても誰も喜ばないだろう、そんなことに手間暇かける金があるのだったら、一人でも多く雇傭する資金に回した方がまし、ということに（その背景には、日雇いを20年しましたが、その間、雇入通知書なんて一度ももらったことがないという事実もありました）。

行政も、この時は頑張りました。国が緊急地域雇用特別交付金は日雇いを対象にしたものではないと主張するのを、何とかねじこんで使えるようにしたし、地域外の就労現場の確保についても、随分と知恵を絞り、努力を払ってくれました。

地域外に出ることになって困ったのは、昼食の対応でした。雨が降ったときなど、食べる場所が確保出来るか。地域内清掃は、弁当と食べに行くことが選択できますが、それと同じようにして、集合時間にきちつと集合できるだろうか。地域内でも、たまに、昼食に行つたまま、時間までに詰め所に戻つてこない人がいましたから、当然、予想される心配事でした。結局、地域外は例外なく弁当ということにせざるをえませんでした。一日45人就業が105人に急増、初日は随分と緊張しましたが、就業に来た人たちの協力があって、朝の受付もスムーズに流れ、午後、賃金支払いが終わったときは、ほつとしたものでした。今から12年前のこと。とりとめもない思い出話につきあわせて、申し訳ありませんでした。